

演劇的表現活動の実践Ⅲ

～児童文化演習の実践活動より～

Practice of the dramatic expression activityⅢ

～Practice activity of the juvenile culture practice～

佐 藤 厚
Sato Atsushi

キーワード：劇あそび・主体的活動・自己実現（発見）・同化活動・共同体験

はじめに

教育の中に「劇あそび」を取り入れたジョン・デューイ（John Dewey）は「子どもの精神の創造的遊戯は彼が使用する事物を中心として群がり生ずるところの、諸々の暗示や回顧や予想の結合を通しておこなわれるものである。それらの事物は自然な、直接的なものであればあるほど、子どもの想像的な遊戯を真に表現的なものとするあらゆる連想的な暗示を呼び起こし結合するのにより一層明確な基礎が得られる」としている。こうした劇あそびの重要性に基づき、今回も幼児教育学科2年生「児童文化演習」の授業の一環として、附属幼稚園（対象：年長組）での劇あそびや朗読劇の実践演習を行った。今まで一連の活動は室内で活動してきたが、今回は当学園の敷地内にある自然豊かな裏山で活動を試みた。過去行った劇あそび「スカーフ売り」とサル」を実際に大きな樹々がある裏山で行った場合、子どもたちの反応が室内で行われた場合とどのように違っていたかの活動報告と、学生たちには、自分たちの朗読劇のパフォーマンスや劇あそびが子どもたちにとって、より楽しくスケールの大きなものになったかどうかを今回の活動を通じて体験させ、指導者としてどのような言葉がけや表現力を駆使しながら活動することが効果的なのかを探らせてみた。同時に、実践演習で作成・使用した朗読劇の脚本を掲載する。

【北野学園の裏山で行われた劇あそびの活動記録及び朗読劇の脚本】

※劇あそび「スカーフ売りとサル」の構成台本は「紀要34号」に掲載したとおりであるので、ここでは割愛し活動の様子を撮影した写真と内容を掲載する。

・子どもたちの様子

朗読劇「小さな赤いめんどり」「ともだちや」

気温30℃を超える中での熱演に、暑さを忘れ食い入るように観る子どもたち



学生たちも、子どもの真剣なまなざしと裏山の環境に助けられ、練習時以上の力を発揮。本番に強い学生たちの底力…。

劇あそび「スカーフ売りとサル」

ある夏の暑い日の午後

お猿の一族が住む森にスカーフ売がやってきた。



二人は大きな木の下での切り株で昼寝を始めた。まず、ボスザルが様子を見に…。



子ザルたちは、バスケットの中のスカーフが欲しくて欲しくてたまりません。

ボスザルの許しが出ると大喜び！スカーフを飛ばして遊び始めます。



やがて、スカーフ売りが目を覚ますとサルたちは大慌て！ボスザルやお姉さんザルについて、木の上にかくれた。スカーフ売りも大切なスカーフがなくなって大慌て！



モノマネ上手のサルたちに気づいたスカーフ売りは、首に巻いていたスカーフをバスケットの中に入れてみせた。するとサルたちも次々に持っていたスカーフをバスケットの中に…。こうして、スカーフも元に戻り一安心。サルたちも楽しい夏のひと時を過ごすことができました。

〈屋外での表現活動〉

夏の暑い日ざかりの中、学生たちの声が蝉時雨でかき消されるぐらいの環境であっても、今までの屋内での表現活動に比べ、子どもたちには言うまでもなく生き生きと活動を楽しむ様子が見られた。劇あそび「スカーフ売とサル」も題材として裏山の環境にぴったりであったこともその効果を上げていた。授業内で素話の練習をした学生には、声の出し方や話し方のコツなどを指導してきた。しかし、裏山の環境はその学生の持つ能力をさらに高めていた。それは、朗読劇をした学生たちも同様である。毎年のことではあるが、2年生の前期中は実習があり全員が揃っての練習は3～4回であった。今まではその影響がありやや不安の多い発表もあった。今回も全く不安がなかったわけではなかったが、各パフォーマンスに対する子どもたちの反応で

その不安は払拭された。2作品で約30分間、裏山の自然環境は、子どもたちと学生たちを一体化し、観る者を魅了し、また、演ずる者の能力を高める相乗効果を上げていた。

無論、屋内での表現活動は実際に大きな樹々などはないため、脚立や跳び箱、ウレタン積み木などで樹々に見立て、遊戯室やホールが森の中になるといった想像力を高める効果もある。しかし、裏山の本物の自然には到底かなわない。音響や照明効果も自然の中にある。懐の大きな自然環境の中では、子どもたちも学生たちも多少の失敗を恐れず、自己表現することになんてらいもなくダイナミックな活動に終止できた。この体験は、後述する自己実現—自信を持つことや、自己再発見の基盤になることとなった。

〈表現活動の教育的効果〉

小池タミ子は「劇遊びを遊ぶ」で劇あそびの意義について「おとなたちは、お祭りやカーニバルに参加することによって、人間らしさをとりもどしていきました。おなじように、子どもを知的にも情動的にもバランスのとれた人間に育てるためには、現実への適応ということではなく、自分自身を主人公にして、それにまわりのものを『同化』させていく活動—劇あそびのような活動を、気のすむまでやらせることがどうしても必要なのです。子どもたちは、あそびの中でこそ、日常の生活の規則にしばられずに、自由に想像をふくらませ、物事を思いのままに創造することができるのです。そして、ふだんは発揮できないような、その子のかくれた表現能力が、最大限に使われ、生かされるのです。」i)と語っている。

また、劇あそびの活動を子どもによる物語の創造として「幼児たち自身が主体的に時間を生きたことがあげられる。幼児にとって遊びが自由かつ自発的な行為である限り、主体として他者や世界を体験しているのである。しかも、遊びは言葉を中心として展開されるのではなく、身体として経験されるものである。劇あそびのように、自分以外のものになるおもしろさを味わう遊びは、なおのこと身体が重要となってくる。」ii)と説いた師岡章の指摘は、今回の「スカーフ売りとサル」の中に十分にあてはまる。劇あそび中、全員サル語「キーツ！」でしか話せないのがあったが、子どもたち同士、また、学生たちとも意思疎通が図られ、素話であらかじめ聞いていたストーリーの枠をはるかに超えた遊びを創造し楽しんで活動していた。劇あそびの中には「創造的な自分の発見」と「一緒に作り出す喜び」があり自分と他者がいつも何でも同じではなくとも、つまり、それぞれに異なっている仲間と共同しあえるという喜びを体験することなのだ。それぞれが自分なりのイメージや考えや技術を持ちつつ、一緒に創り出せるという喜びを満喫できる場こそ、ごっこ遊びそのものなのだ。iii)

スカーフ売りとサルの子どもたちは、スカーフ売りの真似をして楽しんでいる。こうした模倣行為は「劇的本能」でもある。他者を演ずることを通して自らを実現（発見）する行為である。エリクソンは「子ども時代における《演劇的》な遊びは、自体の雛形を創造し、そこで過去の諸側面を再体験し、現在を再演し再生し、さらに未来を予測する、という人間の生得的傾向の幼児的形態を提供するものである」iv)と述べている。こうした活動は今後も継続的に行っていくとともに、子どもたちの生き生きとした自己表現活動の姿を肌で感じ取ることができた学

生たちにとっても、指導者になるにあたり、大変貴重な体験になるものとして大切に行っていきたい。

〈活動で使用した朗読劇台本〉

【小さな赤いめんどり】

作：アリソン・アトリー

訳：神宮 輝夫

構成台本：佐藤 厚

N1・2：小さな赤いめんどり

N 1：昔話の一つ

N 2：むかしむかし

N 1：田舎の大きな農家の庭に、

N1・2：動物たちが住んでいました。

N 2：イヌがいました。

イヌ： ワンワンワン！

N 2：そして、ネコ。

ネコ：にゃ～お～

N 2：そして、ブタ。

ブタ：ぶーぶーブヒ～！

N 2：そして、小さな赤いめんどり。

めんどり：コッ、コッ、コッ、コッ、コッ！

N 1：ある日、そのちいさな赤いめんどりは何粒かの小麦の種を見つけました。そして…

めんどり：誰か私が小麦の種をまくのを手伝ってくれないかしら？

N 1：と小さな赤いめんどりは聞きました。

ブタ：僕いや～。

N 2：とブタが言いました。

イヌ：僕もいや～。

N 2：とイヌが言いました。

ネコ：私もいや～。

N 2：とネコが言いました。

めんどり：それじゃあ、私が自分でこの種をまくわ。

N 1：と言って、種をまきました。

三匹：ひとりでやれよ、ヘッ、ヘッ、へ〜だ！

N 2：そのうち小麦は大きくなりました。

めんどり：誰か、小麦を刈るのを手伝ってくれる？

N 1：と小さな赤いめんどりは聞きました。

ブタ：いやだぶう。

N 2：とブタが言いました。

イヌ：いやだわん。

N 2：とイヌが言いました。

ネコ：いやだにゃ〜。

N 2：とネコが言いました。

めんどり：それじゃあ、私が自分で小麦を刈るわ。

N 1：と言って、小麦を刈りました。

三匹：ひとりでやったよ、ヘッ、ヘッ、へ〜だ！

N 1：そして…

めんどり：誰か、小麦を粉ひき場まで持って行くの手伝ってくれる？

N 1：と小さな赤いめんどりは聞きました。

ブタ：いやだぶう。

N 2：とブタが言いました。

イヌ：いやだわん。

N 2：とイヌが言いました。

ネコ：いやだにゃ〜。

N 2：とネコが言いました。

めんどり：それじゃあ、私が自分で小麦を粉挽き場まで持って行くわ。

N 1：と言って、小麦を粉挽き場まで持って行きました。そして…

めんどり：誰か、小麦を粉に挽くの手伝ってくれる？

N 1：と小さな赤いめんどりは聞きました。

ブタ：いやだぶう。

N 2：とブタが言いました。

イヌ：いやだわん。

N 2：とイヌが言いました。

ネコ：いやだにゃ〜。

N 2：とネコが言いました。

めんどり：それじゃあ、私が粉を挽くわ。

N 1：と言って、小麦を粉にしました。そして…

めんどり：だれか、この粉でパンを作るの手伝ってくれる？

N 1：と小さな赤いめんどりは聞きました。

ブタ：いやだぶう。

N 2：とブタが言いました。

イヌ：いやだわん。

N 2：とイヌが言いました。

ネコ：いやだにゃ～。

N 2：とネコが言いました。

めんどり：それじゃあ、私がパンを作るわ。

N 1：と言ってパンを作りました。

N 1・2：いい匂いがしてきました。

三匹：うまそうだなあ。食べたいなあ。

めんどり：誰か、このパン食べる？

N 1：と小さな赤いめんどりは聞きました。

ブタ：食べるさづ～！

N 2：とブタが言いました。

イヌ：食べるワン！。

N 2：とイヌが言いました。

ネコ：食べるニャ～！

N 2：とネコが言いました。

めんどり：だめよ！あなたたちは食べられないわ！私が食べますから。

N 1：と言って、小さな赤いめんどりは、一人でパンを全部食べました。

めんどり：い～い、みんな。ちゃんと働かない人は食べることはできないのよ。

約束よ。わかった？

三匹：はあ～い！約束します、みんなそうします。

N 1・2：お・し・まい！

【ともだちや】

作：内田麟太郎

構成：こすぎこういち

ミミズク：ふおああ～あ。わしらの森へようこそ。（日の光をまぶしように）

いつも通り、この森に気持ちのいい朝がやってきたようじゃな。いや、はや。よるもひるも、ききみみをたてているというのは……。ふああああ～ねむいねむい。

おや、向こうからやってくるのは、キツネじゃな。そういえば、新しい商売を思いついたとか言っておったが……

キツネ：え～毎度おなじみのともだちやです。ともだちはいりませんか。さびしいひとは いませんか。ともだちいちじかん、ひゃくえん。ともだちにじかん にひゃくえん。

ミミズク：ほっほう、ともだちや。確かに新しい思いつきじゃな……じゃがのう……どら、ちょっと様子を見てみよう。

キツネ：え～毎度おなじみのともだちやです。ともだちはいりませんか。さびしいひとは いま せんか。ともだちいちじかん、ひゃくえん。ともだちにじかん にひゃくえん。

ウズラ：ともだちやさん。

キツネ：おっ、さっそくお声がかかったぞ。

ウズラ：ともだちやさん。

キツネ：はいはい、ただいまー。(てもみをしながら) これはこれはウズラさんじゃないですか。何時間にいたしましょう。一時間ですか？二時間ですか？それとも…

ウズラ：あのね、まだ、赤ちゃんが眠っているの。少しの間、静かにしてくれませんか？

キツネ：それはどうも失礼いたしました。

ウズラ：別に怒っているわけじゃないのよ。

キツネ：いや、ともだちやとして、マナーは守らなければいけませんからね。本当にごめんなさい。静かにします。で、何をして遊びましょう。

ウズラ：……あ、あのね。今、この子が眠っているから……

キツネ：そうですね～。

ウズラ：だからね……

キツネ：にらめっこでもしますか。それなら、動かなくてもできるし……ちっちゃな声でやれば大丈夫。(小さな声で) あっぶっぶ。ほらね。

ウズラ：そういうことじゃなくて、はやくどっかへ行ってちょうだい。私は別に、注文したんじゃないの。

キツネ：……はあ、そうだったんですか。し、失礼しまーす。(小声で) え～毎度おなじみのともだちやです。ともだちはいりませんか。さびしいひとは いま せんか。ともだちいちじかん、ひゃくえん。ともだちにじかん、にひゃくえん。

ミミズク：ほっほう、あんな調子で、この先やっていけるのかのう。ともだちや……ともだちやねえ～。

キツネ：え～毎度おなじみのともだちやです。ともだちはいりませんか。さびしいひとは いま せんか。ともだちいちじかん、ひゃくえん。ともだちにじかん にひゃくえん。

クマ：なんだ、なんだ。声がちっちゃくて聞こえんぞ。もっとでっかい声で言え、でっかい声で。

キツネ：(でっかい声で) え～ともだちやです。これはこれは、クマさんでしたか。こんにちは。(クマはイチゴを食べている。)

クマ：そんな小さな声で歩いてたんじゃ、なんだかわからん。なにやだって？

キツネ：ともだちやです。

クマ：そうか、ともだちやか。いくらだ。

キツネ：いちじかん、ひゃくえんです。

クマ：買った、買ったぞ。おれも、ひとりぼっちの食事はつまらんと感じていたところだ。ここにこんなにおいしいそうなイチゴがあるんだ。いっしょに食ってくれ。

キツネ：イチゴ!? は、はい。よろこんで。

（キツネ、きれいなのを我慢して、笑いながら食べる）

ミミズク：ほっほう、ほほう、キツネのやつ、無理しおって。キツネはイチゴは食べれんはずじゃが……

クマ：ともだちと くうイチゴは いちだんとうまい。なあ、キツネ。

（クマはキツネの肩をポンポン叩きながら言う）

キツネ：ええ、うまいですねえ。

クマ：そうかそうか、じゃあ食後に、ハチミツでもなめようじゃないか。

キツネ：（明らかに動揺して）そ、そうですね。いただきます。

クマ：どうだ、あまいだろう、ともだち。

キツネ：ええ、あまいですね、ハチミツは。クマさん。

クマ：クマさんだって？やめろやめろ、ともだちじゃないか。クマでいい、クマと言え。キツネ。

キツネ：……ク、クマ。

クマ：もっと、でっかい声で言え。

キツネ：（でっかい声で）クマ。

クマ：なんだ、キツネ。

キツネ：アハ、アハ、ハハハハ。

クマ：よしよし。食事はもう終わりだ。ありがとうよ。ともだちや。

（クマは、お金を渡す）

キツネ：（でっかい声で）ありがとうございます。また、いつでも呼びください。では、失礼いたします。

ミミズク：ほっほう。キツネの奴、大丈夫かのう。きっと、お腹がしくしく痛くなったんじゃないかな。まあ、仕事なんだから仕方がないのう……。

（お腹を押さえながら、くるしそうに）

キツネ：え～毎度おなじみのともだちやです。ともだちはいいりませんか。さびしいひとは いま せんか。ともだちいちじかん、ひゃくえん。ともだちにじかん にひゃくえん。

オオカミ：おい、キツネ。（こわもての声）

キツネ：……これは、これは、オオカミさん。ま、まいどありー。なんのご用で？

オオカミ：トランプの相手をしろ。

キツネ：……へえ。

（オオカミとキツネはトランプをする）

（しばらく、トランプをする）

オオカミ：やっぱ、トランプは一人でやるより、二人でやるほうが楽しいもんだな、キツネ。

キツネ：は、はい。では、そのう……

オオカミ：なんだ。

キツネ：お代を頂きたいのですが……

オオカミ：お代だって！お前は、ともだちから金をとるのか。それがほんとうのともだちか！

キツネ：ほ、本当のともだち？

オオカミ：そうだ、本当のともだちだ。おれは、ともだちやなんか呼んだんじゃない。お前のことを「ともだちや」なんて呼んだためしはないぞ。えっ？お前がここを通ったとき、「おい、キツネ」って呼んだだろう？

キツネ：……それじゃ、あしたも来ていいの？

（キツネは手をひっこめながら聞く）

オオカミ：あさってもな、キツネ。

キツネ：と、ともだちだから？

オオカミ：ああ、そうともさ。

キツネ：本当のともだちだから？

オオカミ：友情のあかしに、これをもらってくれるか？キツネ。おれの宝物だ。

（オオカミ、キツネにミニカーを渡す）

キツネ：あ、ありがとうオオカミさん。

オオカミ：いいってことよ。ともだちだもん。明日は、クマやウズラも呼んでやろう。トラ
ンブは、大勢でやったほうが楽しいからな。

キツネ：みんなとも本当のともだちになれるかな？

オオカミ：ああ、みんなともだちだ。じゃ、また明日な。

キツネ：うん、また、明日。

えー、ともだちは いりませんか。

何時間でもただ。まいにちでも たです!!

（キツネは、スキップしながら、楽しそうに帰っていく）

ミミズク：ほっほう、ともだちやなんて、長く続かないほうがよかったんじゃよ。どうやら、
森一番のさびしがりやは、ともだちをつくれたようじゃの。ふああああー、あしたはきつ
と、今日よりもっと気持ちのいい朝になるだろうなー。

出典「ともだちや」偕成社

2012 幼児教育学科 児童文化演習

〈参考文献〉

- ・ John Dewey, The Child and the Curriculum and The School and Society,
The University of Chicago Press, 「学校と社会」 宮原誠一訳 岩波書店
PP.118－119 PP.123－124
- ・ 「子供のための創造教育」 ジェラルディン B.シックス, 岡田陽・他訳 玉川大学出版部
- ・ 「小さな赤いめんどり」 作: アリソン・アトリー 訳: 神宮 輝夫 大日本図書
- ・ 「ともだちや」 作: 内田麟太郎 構成: こすぎこういち 朗読劇台本集 玉川大学出版部

〈引用文献〉

- ・ i) 「劇遊びを遊ぶ」 小池タミ子・平井まどか編 晩成書房 PP.29－30
- ・ ii) 「物語行為としての幼児の遊び—5歳児の遊びを対象として—」 師岡章
子ども文化研究所編 『別冊 子ども文化』 NO.3 P.41
- ・ iii) 「文化の出会いと表現の広がり」 花原幹夫 八木紘一郎編著 「ごっこ遊びの探求」
新読書社 PP.130－131
- ・ iv) Erik H. Erikson, Toys and Reasons, W.W. Norton & Company, Inc, P44